

問題提起 ②

後 房 雄 (名古屋大学法学部教授)

はじめに

日本の「戦後革新勢力」のなかには、協同組合に対する「不信感」が抜き難くあったのではない。こうした「不信感」は単なる偶然ではなく、マルクス主義の強い影響を受けていた戦後革新勢力の「政治文化」(あるいは「運動文化」)に根差した構造的なものであった。したがって、生活協同組合の躍進に触発された協同組合の再発見、再評価はその「政治文化」問い直しの一層の徹底を伴うものであったといえる。理論的には、レイドロー報告がその嚆矢をなした。

80年代の「防衛戦」への自己分析

左翼にとって80年代は「防衛戦」の時代であった。協同組合においてもその「思想的危機」は一段と深刻になった。

ベーク氏によれば、50年代と60年代に西欧の協同組合が成功をおさめたのに対し、70年代後半から80年代において協同組合システムとその「環境」との間のズレがどんどん拡大していったと言う。「何かがおかしい」と皆が感じながらその「何か」とは何なのかがわからないという感覚は、当時の日本の社会運動にかかわっていたものであれば多少とも共通に抱いていたものではないだろうか。

こうした状況をもたらしたのものとして、ベーク報告が指摘するのは、協同組合の経営効率偏重への傾斜と理念的側面や民主的運営の後退、希薄化などであるが、より広い文脈で言えば、「物質的ニーズ」から「個人の自己実現と自由」への人々の求める価値の優先順位の変化、それを抑圧する「新しい階級構造」の出現などの運動「環境」の変容に対して、協同組合の組織構造やサービスが十分に対応しえていないこと、まさに運動と「環境」のズレである。

「新しい協同組合」の意義

こうした状況からの脱却方向としてベーク氏が提起するのは、あくまでも正攻法であるが、次の二つの強調点に注目したい。

一つは、「協同組合の基本的価値」の再認識であり、もう一つは、協同組合本来の理念の再生を展望させるような具体的な動向を先進工業国の現実の中に探り当てていることである。その中心的要素こそ「新しい協同組合」であった。

二つの理論潮流との交錯

ベーク氏の主張が、筆者が現在もっとも有効性をもつと感じている二つの理論潮流の主張と、期せずして重なっていることは大変興味深い。

その第一は、ベーク氏による19世紀の初期協同組合と現在の「新しい協同組合」との重ね合わせという大胆な発想の先駆ともいえる、アラン・トゥレーヌの「新しい社会運動」の理論である。トゥレーヌによれば、女性運動、地域主義運動などの「新しい社会運動」は、「自らの生活様式を選択する住民の権利の名において」、彼らの自治能力の名において展開されるという。ベーク報告にいう「新しい階級構造」や「新しい協同組合」の理論的把握にとって示唆に富む。

もう一つの理論潮流とは、トゥレーヌのいう新しいテクノクラシー社会の出現を、高度成長を可能にしたフォード主義の危機と「ポスト・フォード主義」の模索という文脈において捕らえ、「新しい左翼」の再構築をテーマに理論的格闘を続けるレギュレーション理論である。彼らの構想では、生活の質を左右する新しいサービス部門を生産者と生活者双方の自己決定を促進するような形で担う「社会的経済」と呼ばれる協同組合複合体に「特別の役割」が期待されている。まさにこれは「新しい協同組合」に他ならず、ベーク氏がこのフラ

ンスの「エコノミー・ソシアル」に注目していたのは偶然ではない。

このような理論的主張をそのものとして受け入れるかどうかは別にして、これほどの大胆さをもった新しい展望を構想すべき状況に我々が直面しているという認識の共有が必要であろう。ベーク報告はまさにそのような認識から出発している。筆者にとってのベーク報告の魅力の核心はそこにある。

(『仕事の発見』No24より 文責：手島繁一)

参加者感想文

◇塩野 俊治(山形/小学校教員・生協共立社)

①協同組合という確かに組合員の協同だとは思のだが、労働者協同組合はその内部だけの民主主義でいいのだろうか。教育・文化面の協同組合を考えると、その受益者側の参加を前提として初めて成立する協同組合のように思う。だとしたら、その民主主義も考えなければならないのではないか。その視点にもっと重くみなければならないのではないか。複合的な協同の追求も同時に追及されなければならないのではないか。班活動の意味の強調はベーク報告でどう報告されていたのか。ふれられなかったが、それでいいのか。

②地域づくりの関係でも、ふれられていなかったのではないかと。協同組合が一つで地域は変わるか？ 70%を鶴岡で組織しながら、なお自治体首長を民主化できない。医療生協も比重が小さくない。労働者協同組合もあり、福祉協同組合もある。それがあって初めて教育・文化協同組合の存立が可能になるし、これからの協同組合がうまくいって、自覚して自立した住民が主人公になった地域づくりができると思う。

参加者感想文

◇新田 鉄三(埼玉/センター事業団・埼玉ブロック)

①生協での職員(従業員)がどう運営(経営の面でも)参加するか

②職員も自分たちで出資し、自分たちで働く場、生協の仕事を保証するというのであれば、生協の職員もセンター事業団と今後一つの組織になる時代も来る可能性があるのではないかと。

◇磯部 武(神奈川/センター事業団・藤沢)

日本における(高齢者協同組合づくりというような)協同組合の理論的諸問題がむずかしかったが、私にも少しわかった様な気がします。学校も小学校程度しか(それも戦争中ですから学校をでたとは言えませんが)でない私にとっては、もっと働く者にとって言いたいところですが、ここではやむを得ないと思います。わかりやすい講座が現場で必要だと思いました。

◇宗田 幸彦(東京/センター事業団・本部)

(累積赤字をかかえている)鎌倉医療生協の理事もやっていますが、この中での労働組合の活動はどうあるべきかということに疑問をもっていたところ、協同組合内労働の性格についてどうあるべきかの議論が始まっているのを知って、本当に良かったと思います。医療生協の中でもおおいに議論していきたいと思っています。

◇廣田 正勝(福岡/企業組合クリーンセンター福岡)

国労闘争の財産として労働者協同組合に貢献して行けたらと思います。

◇宮本 偉(ぐーぶ・いま)

新しい協同、協同間の協同ということでの進展が興味深かった。